



の卓^{たく}絶^{せつ}セヨ事^{こと}、明日^{あした}又^{また}書^か出^ださむ想^{せう}のいかにも凄^{せつ}絶^{せつ}ニヨ事^{こと}
 を思^{おも}へば、己^{おのれ}がうけよはほとくと堪^たへがたうけりぬ。この
 作^{さく}の出来^{でき}上^あらむ折^せ、この作^{さく}のせよ出^だてむ折^せの樂^{たのしみ}しさはい
 かぶべきか。
 不^ふ置^ち又^{また}神^{いん}来^き之^の候^{とき}と感^{かん}じて、我^{わが}は思^{おも}はず手^てと拍^うちしが、
 傑^{けつ}作^{さく}と云^いひかけて立^た上^ありつ。心^{こころ}も無^なくて頭^{かしら}と拳^{こぶし}れ
 ば、いつの程^{ほど}まかいてけむ、十六^{じゅうろく}日はかりの月^{つき}は早くも
 新^{しん}緑^{りよく}の陰^{かげ}よりぬ。
 その儘^{まま}にれは小^{せう}丘^{きゅう}と下^{くだ}りて、猶^{なほ}心^{こころ}も空^{くう}中^{ちゆう}樓^{ろう}閣^{かく}と画^えきつ
 、茫然^{まぜん}として只^{ただ}夢^{ゆめ}のごとく月^{つき}明^あの中^{ちゆう}と歩^あり行^いきぬ。
 何^{いかん}処^{ところ}も是^{こゝ}のぬ身^みの志^{こころ}はしかほとは昔^{むかし}の屋^や敷^{しき}跡^{あと}のやうにぬ
 処^{ところ}と過^すぎたりと覚^{おぼ}えが、或^{ある}る家^{いえ}の門^{かど}より年^{とし}の頃^{ころ}八九^{はちゅう}歳^{さい}
 とし切^きりま小^{せう}童^{どう}のちりろとと走り出^でて、我^{わが}前^{まへ}と過^す
 ぎつ、姉^{あね}様^{さま}と云^いふが如^{ごと}く聲^{こゑ}我^{わが}耳^{みみ}より入^いりたりとおぼえ
 て、我^{わが}は急^{いそ}ぎに乱^{みだ}れたる空^{くう}想^{せう}の境^{きやう}と脱^{だつ}しつ。
 空^{くう}想^{せう}の境^{きやう}と離^{はな}れたる己^{おのれ}が眼^{まなこ}に、先^{まづ}映^{うつ}れは、昔^{むかし}住^すみつる
 己^{おのれ}が橋^{はし}居^いの小屋^{こや}よりぬき、驚^{おどろ}きぬから我^{わが}は月^{つき}と刮^かして再^{また}
 び見^みぬ。されどまことと此^{こゝ}處^{ところ}は其^{その}後^{のち}絶^たえて久^{ひさ}しく来^{きた}りし
 こゝれき昔^{むかし}の己^{おのれ}が拳^{こぶし}めて、奥^{おく}には猶^{なほ}かの地^ち主^{ぬし}坂^{さか}田^た正^{ただ}幸^{ちか}
 ぶる人^{ひと}住^すめりとおぼし。

天
才

甲子三月廿九日

少卿の筆

藤城



天才

少楽小集

一と

介

房か通ひの汽船は佃前へ入つた。

同窓者一が上陸山から一掃に乗つて来り

連の男は、吉一が向ひに滞在宿の

亭主と賭碁の仲間、(帳場)始終おひさま

と薪屋の主人である。船が仰る、彼を下さ

下宿する、ト、月島の端を廻り、

鳴し出、汽船をとり、船中、まねた月島

物物を拾へて甲板に乗る、持、

汽船の動きをみながら動もあらず、一人て

汽船の動きをみながら動もあらず、一人て

汽船の動きをみながら動もあらず、一人て

汽船の動きをみながら動もあらず、一人て

汽船の動きをみながら動もあらず、一人て

汽船の動きをみながら動もあらず、一人て

汽船の動きをみながら動もあらず、一人て

汽船の動きをみながら動もあらず、一人て

汽船の動きをみながら動もあらず、一人て

汽船の動きをみながら動もあらず、一人て

汽船の動きをみながら動もあらず、一人て

藤城